

ORIENTEERING JAPAN

**O JAPAN**

Navigation across Country

'95 / 9

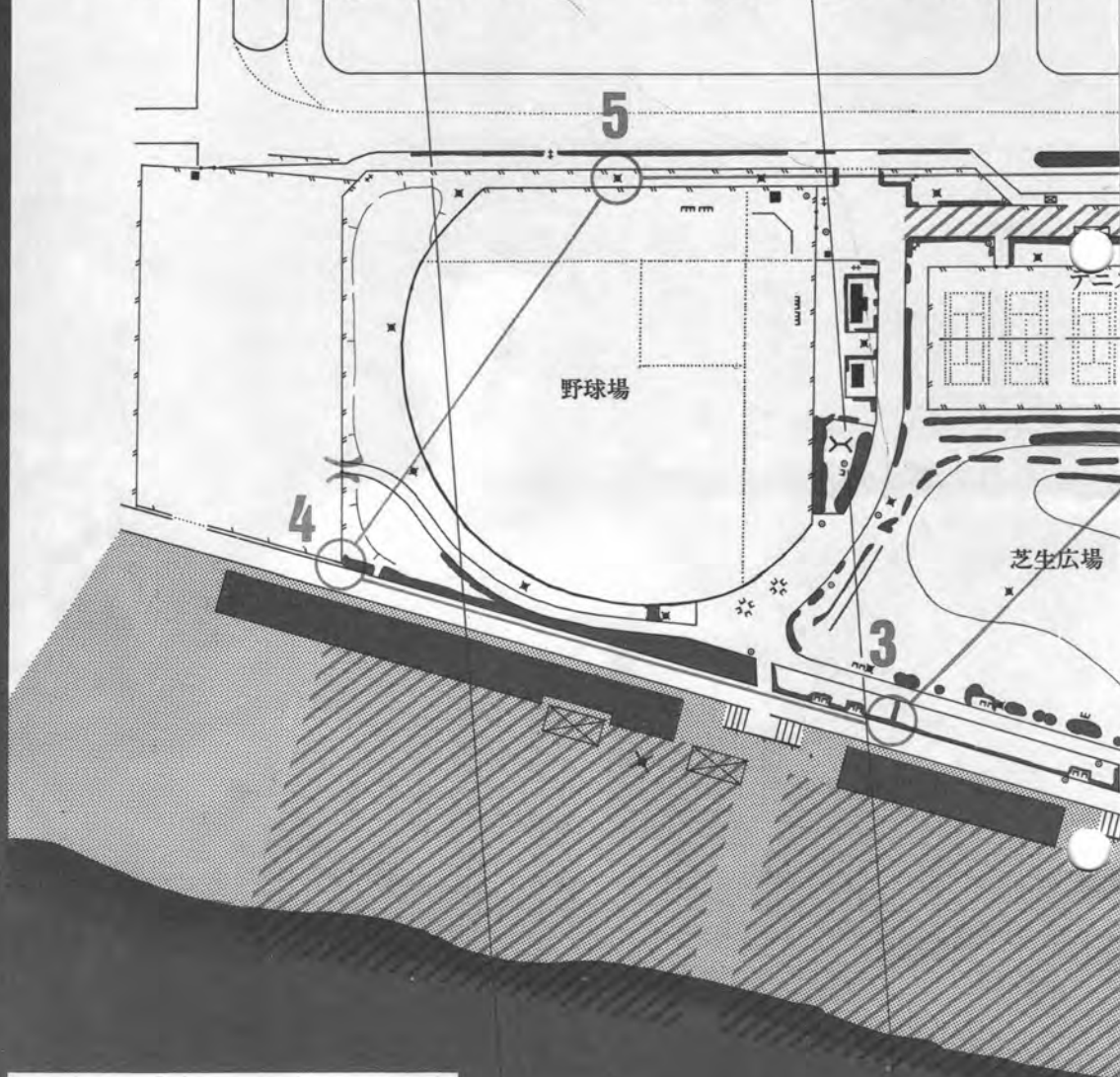
1995年 [平成7年] 9月10日発行  
(毎月1回10日発行)  
第12巻第9号通巻第146号  
昭和63年6月24日第三種郵便物認可



きみもチャレンジして



# BAY PARK



- ■ 建物・構造物
- ☒ ☒ 簡易構造物
- ㄣ ㄣ さく(通行不能、可能)
- ✕ 塔
- × × 街灯、看板
- ● ベンチ、ゴミ箱
- ○ 柱、水飲み場
- × その他の人工特徴物
- コブ
- / 橋込・ヤブ(通行困難)



縮尺 1:2,000  
(1 cm = 20m)  
等高線間隔 2m

調査日 1994年11月  
調査作図 鈴木健夫  
調製 R.M.O-サービス  
3000



95/9月号・No.146 目次



＝ SQUAD REPORT ＝	報告・桐田 幸宏	… 4-13
・ 第16回オリエンテーリング世界選手権大会		
・ 第6回ジュニア世界選手権大会 (JWOC)		
＝ 長野オリンピック冬季競技大会 ＝		… 14-16
・ 国際スキーオリエンテーリング大会 最新情報		
長野県オリエンテーリング協会の理事長・元木 悟		
＝ オリエンティアのための Medical Advice ＝		… 17
・ 熱中症の話	愛場 庸雅	
＝ イベント リポート ＝		… 18-21
・ 第3回 6人リレーOクラブカップ	桐田 幸宏	
＝ 全国PC愛好会のページ ＝		… 22
・ パーマネントコース りぼ〜と	吉田 勉, 富田 徹	
＝ お知らせのページ ＝		… 24
・ ビヨン・チェルストレーム氏死去		
・ 各地の新聞から		
「五輪文化事業に名乗り		
＝スキーオリエンテーリング大会を」	信濃毎日新聞より	
・ 編集部日誌		

□ □ □ □ □

## STREAMER

話がとびとびになりますが、6月号のこの欄に続けて見ます。結論としては、『トリムO』とは、100キロコンペのことであって、トリムOの“実施基準”など全く必要はないと思います。まして、その実施基準(案)なるものを読ませていただくと、何とタイムを競う『競技』となっています。つまり、オリエンテーリング競技を単に“グループ”で行なうにすぎないのです。「普及専門委員会」なるものがあるのか、ないのか、わかりませんが、そのメンバーとなっている方々は、どういう基準で選ばれているのでしょうか?真に、オリエンテーリングを愛し、常に内外の状況を把握し、考え、議論し、そして何よりも、いま現在普及活動を行なっていると自負できる方々なのでしょう。『トリムO』の実施基準をつくらねば、それは「トリムO専門委員会」を組織して、そこで検討されるべきです。トリムOの実施基準をつくっても、決して普及に

■今月の表紙: WM95 ショート予選(8/18 ドイツ)のゴールを力走する木植選手。日本人として初の予選通過。

■今月の地図: 東京湾岸にはいくつかの「海浜公園」が整備されている。2・23ページは千葉県・鈴木健夫氏、カッター裏に掲載したものは港南OLC 菊地淳二氏により、いずれも調査・作図されたもの。



身近な公園でのシンプルなOL。「教室」を重ねて行なうことで初心者の定着をはかろう。

はつながらないのではないのでしょうか?その昔、10,000人近く集まったという『徒歩OL』を懐古しているだけでは駄目です。今、公認大会などで『トリムO』として以前の『徒歩OL』とほとんど代わり映えない方法で併設していますが、これを、特に所要時間で順位をつけることなどやめようではありませんか。もっと単純に、例えば『1日パーマネントコース』を大会に併設し、初心者には教室に参加(通りいっぺんの「初心者コーナー」をやめて)してもらって、懇切な指導を行なえばよいでしょう。競技志向の初級者はNクラスに参加してもらえばよいでしょう。Nクラスへの参加はペアやグループでも可とすれば、これでこれまでの「順位をつけるトリムO」の代わりになります。とにかく、特にオリエンティア全般に言えることです。ちょっと凝り固まっていますか?それこそ、頭にタコができていませんか?今、柔らかく頭が必要です。

&lt;流人&gt;

## SQUAD REPORT

## 第16回オリエンテーリング世界選手権大会

WOC・SQUAD・JAPANは強化選手をサポートしています

SQUAD広報担当 桐田幸宏

第16回WOCが閉幕した。8月5日に旅だっていた選手団の遠征日程は次のとおり。

8/7~11	トレーニング
8/14	モデルイベント
8/15	クラシカル予選
8/16	クラシカル決勝
8/18	ショート予選・決勝
8/20	リレー

結果は以下に示すが、特筆すべきは女子で、木植早生選手が日本人として初めてショートの予選を通過したこと。これは今後への展望も含めて、日本選手団に大きな励みとなったようだ。

また、男子では、リレーで最後まで順位を上げ続けるという、過去に例を見ない展開を演じている。村越・鹿島田の2大エースに次ぐ若手選手の成長が背景にある。

今回は成績とともに、SQUAD BULLETINからの転載でコーチ陣からの報告、加えて、遠征した選手のコメントを掲載する。



\*写真提供は木植選手です。ありがとうございました。

開会式・入場行進に臨む日本選手団

## SQUAD BULLETINより転載

ジェネラルマネージャーより

藤井範久

はじめに、ドイツで行われた第16回オリエンテーリング世界選手権大会への日本チームの遠征に対して多額の賛助金をお寄せいただき、日本チームを代表して感謝いたします。お寄せいただいた賛助金は、選手の個人負担金やSQUADの資金援助とともに遠征資金として活用させていただきました。また日本から激励の手紙を送っていただいた方々、そしてドイツまで直接応援に来ていただいた方々もおられ、チーム一同感謝の気持ちで一杯です。また選手選考会、合宿、チャリティ大会の開催など、チームの遠征に協力してくれたSQUADのメンバーに感謝します。

さて、日本選手の成績を簡単に紹介します。クラシカル（ロング）レースは残念ながら男女とも予選通過者を出すことはできませんでした。ショートレースで木植が14位で予選を通過しました（15位まで予選通過）。世界選手権でショートレースが採用されるようになって初めての決勝レース出場者になります。午後に行われた決勝レースでは前半のミスによって60位（最下位）に終わりましたが、女子選手が決勝レースを走ったことは現在の日本の女子選手の実力を考えると高く評価できるものです。また最終日のリレーでは、男子チームが35チーム中22位、女子チームが24チーム中22位とほぼ実力通りの結果といえます。しかし言い換えると、実力的に負けないチームには負けなかったが、できれば勝ちたいというチームには勝てなかったというのが実情かもしれません。

前回の世界選手権大会での村越のショート予選11位から、今回の世界選手権大会では実力的に同等の鹿島田が村越とともに予選を通過することが大いに期待されていました。またそれを追いかける鈴木、加賀屋、入江の3選手にしても、完璧なレースをすれば予選通過の可能性はあるはずでした。しかし男子チームでは予選通過者はゼロ。東欧圏、特にソ連の崩壊に伴う参加国、参加人数の増大が予選通過を困難にした要因の一つと考えられます。しかし、ミスがなければ全選手に予選通過の可能性があるほど日本の実力が上がったことは喜ばしいことです。

一方、女子チームでは、木植の予選通過が快挙である。ドイツでの最終トレーニングキャンプ中の木植は、他の4選手（金子、福土、田島、金田）より飛び抜けて速かったし、さらには男子選手よりも安定した走りを示しており十分に可能性はあると思われた。そして彼女の性格そのままに冷静なレースをすることによって予選通過を果たした彼女は、以前の村越のようにも見えてきます。これまで日本の女子チームは予選通過するためにはどのようなレースをすればよいのか、その指針すら手に入っていなかったのですが、他の女子選手にとっては木植を明確な目標として捉えていくことができるでしょう。

数年前「村越が4人いればリレーで上位が狙える」という話がありました。鹿島田は村越が歩んだ道をするようにして村越に追い付き、そして並んだ。二人が通った道を他の多くの選手が追いかけてきた。そして2年後には「村越が4人・・・」、そして女子についても「木植が4人・・・」ということは達成できるでしょう。しかし「村越が4人・・・」だけを考えていたのでは、世界のトップは見えてきません。村越、鹿島田や木植が速くなり、また彼らを越えるような選手が現われる必要があります。

このように見てくると、今回の日本チームは予選通過という（本来は）通過点でしかない目標に固執しすぎたのではなからうかという反省が生まれます。確かに現在の日本チームの実力では予選通過を目標にすることが、現実的な目標としていいものでした。しかし、特に男子チームについては、そろそろ決勝レースの順位を目標にするべき時期が来たのです。そのためには、これまでのように2年サイクルでの強化策ではなく、長期的な強化計画をたてていく必要に迫られています。皆さんの積極的なご意見やご批判がこの長期計画には欠かせないものとなるでしょう。

本来、ここでは今回の世界選手権大会の総括を行うべきなのですが、最後に個人的な夢を。しかし決して夢に終わらせたくない夢を。「2005年、日本で世界選手権大会、表彰台に日本選手が・・・」。これからも日本チームへのご声援をよろしくお願いいたします。

## シヨート予選

## 木植早生 予選通過 ショート日本初の快挙

## 男子予選1組

1	Ivarsson J.	スウェーデン	31:21
15	Trukhan I.	ウクライナ	35:31
22	鹿島田浩二	日本	38:09

## 男子予選2組

1	Karppinen T.	フィンランド	31:48
1	Banach R.	ポーランド	31:48
15	Prokes T.	チェコ	34:50
27	村越真	日本	38:37

## 男子予選3組

1	Grende A.	ラトビア	32:13
15	Pardoe M.	カナダ	35:33
25	加賀屋博文	日本	39:40

## 男子予選4組

1	Buehrer T.	スイス	31:09
14	Pavlovics G.	ハンガリー	35:16
14	Nutli O.M.	ルーマニア	35:16
31	鈴木康史	日本	43:21

## 女子予選1組

1	Olah K.	ハンガリー	29:01
15	Mazuolyte D.	リトアニア	33:26
27	金田収子	日本	47:13

## 女子予選2組

1	Granstedt A.	スウェーデン	28:12
14	木植早生	日本	33:15
15	Valdmane V.	ラトビア	33:39
16	Baczek B.	ポーランド	33:42

## 女子予選3組

1	Haque Y.	イギリス	27:07
15	Rakayova M.	ロシア	34:43
28	田島利佳	日本	52:03

## 女子予選4組

1	Koeniq V.	スイス	27:50
15	Fey Z.	ルーマニア	33:11
25	福士淑子	日本	42:44

## SQUAD BULLETINより転載

## 男子チーム総括

今回の男子チームは、チームの5人が最もよく準備して臨んだ遠征であり、準備をすればそれに応じた結果が出ることを確認させてくれた。日本チーム全員が世界の選手たちと同じ舞台上で競い合えることを示した最初の世界選手権であった。クラシカル予選では、村越、鹿島田は予選通過のボーダー、つまり全選手中ほぼ中位の成績を残した。これは今までの世界選手権での結果を確認したに過ぎず、あえて語ることはない。注目したいのは、入江、加賀屋が基礎的な技術、体力という面で予選通過に十分な能力を持っていることを示した点であろう。これは加賀屋のショート予選についても言える。

この結果は準備段階から予想されたことであった。日本での合宿やトレーニングキャンプで、しばしば加賀屋や入江は村越や鹿島田に匹敵する結果を出していた。また鈴木もそれに近いタイムを残している。それ自体初めてのことで、さらにそれを本番の場面で結果として現われたのである。

新しいパターンでのリレーの成功も今回の収穫だった。これもまた今回が全体として最もよく準備されたチームであったこと、そしてその準備が結果につながることを示すものである。これまでのリレーチームは、言うなれば先行玉砕、1走をエースがトップスピードで走り、第二集団くらい（トップと5-10分差）につける。その後速い順に走って、いけるところまでいく、そういうリレーであった。確かに村越もその前に1走を走っていた杉山も高いパフォーマンスを示し、リレーの興奮を伝えてきた。それは「村越が4人いれば・・・」という空想も与えてくれた。しかしそれは結局エースの自己満足であり、決してチーム全体の成功ではなかった。リレーとは当り前のことながら、4人全員の合計タイムで競うものなのである。その意味から、1走を初出場である加賀屋でスタートしながら、次第に順位を上げ、参加回数に対する比率では過去最高7の22位の結果を出したことは大きく評価できる。加賀屋、入江のタイムには改善の余地があることも確かである。二人とも最終ラジコンでゴールを受けてから3分程度のミスをしているが、これは皮肉なことに彼らがこれまでの村越+鹿島田の走りのイメージから完全に自由になっていないことを示している。それができた時、彼らはきっと村越や鹿島田と同程度のタイムを出せるようになるであろう。

村越が4人（あるいは鹿島田が4人）という状況が直ちに出現した訳ではない。しかしそれは現実味のあるものとなった。鈴木が触れているように、これは加賀屋、入江、鈴木がセレクションを目標にするのではなく、セレクション通過後世界選手権でどう戦うかを常に考えてきたことの結果である。またもう一つの要因として、小集団でのトレーニングの普及を指摘したい。アメリカの世界選手権への準備にあたり、私と鹿島田は初夏のシーズンに随分と一緒に準備をし、お互いの練習の進捗状況を気にかけた。加賀屋の成功は、その鹿島田と昨シーズンを通して練習をともにしたことが大きい。一緒に練習することは体力的なレベルを高めてくれるだけでなく、オリエンテーリングの楽しみを広げてくれるし、またやる気の動揺を和らげてくれる。

もちろん、今回の男子チームは評価すべき点ばかりではない。準備をすればそれに応じた結果が出せることを示したのは加賀屋、入江、鈴木のみならず、鹿島田、村越は前回の結果からクラシカル、ショートともに予選の通過を目指し、それに応じた準備をしたはずなのに、結果として一度も予選通過ができなかった。加賀屋、入江、鈴木の成功は、いわば村越や鹿島田の追試、すでに分かっているプロセスの確認であった。それに対して予選の通過は、村越がこれまでに2回成功しているものの、その当時とは比較にならないほど参加選手数も厚くなっている。また、予選を通過するためにどんなオリエンテーリングをすればいいかが、どの国の選手にも分かっている。予選通過はこれまで私たちが経験したことのないプロセスを要求する課題となっている。前回は、あとほんのちょっとした努力をするだけで予選が通過できる、そう思われた。しかし根本的にアプローチの方法を見直す必要がありそうである。そのための新しい試みを怠ってきた点は、男子コーチである村越の責任である。ようやくチームのコーチがその技術的責任を問われるところまで来たのである。今回の結果で、ショート、クラシカルとも選手全員が予選通過に向けて準備することが現実的な目標となった。今回の選手一人一人にとっては、それがかなり具体的なプロセスとして感じられるはずである。それを集約するとともに、コーチとしての積極的な介入をコーチとしての次回目標としていきたい。

## 男子コーチ 村越真

## ショート決勝

### 男子

1	Omeltchenko Y.	ウクライナ	30 : 25
2	Maartensson J.	スウェーデン	31 : 31
3	Valstad B.	ノルウェー	31 : 36
4	Buehrer T.	スイス	32 : 01
5	Holmquist L.	スウェーデン	32 : 14
6	Ivarsson J.	スウェーデン	32 : 26
7	Plattner C.	スイス	32 : 40
8	Berqer A.	スイス	32 : 43
9	Coupat O.	フランス	32 : 52
10	Grende A.	ラトビア	33 : 03

### 女子

1	Romanens M-L	スイス	28 : 55
2	Haque Y	イギリス	29 : 16
3	Boqren A.	スウェーデン	29 : 29
3	Jansson M.	スウェーデン	29 : 29
5	Schmitt Graf	ドイツ	29 : 31
6	Kubatkova M.	チェコ	29 : 42
7	Staff H.	ノルウェー	29 : 45
8	Mihalko I.	ロシア	29 : 53
9	Granstedt A.	スウェーデン	29 : 59
10	Koskivaara E.	フィンランド	30 : 12
60	木植早生	日本	44 : 29



ショート女子表彰式 (8/18)



男子リレー・ウイニングラン (スイスチーム) 左から  
Aebbersold・Berqer・Buehrer・Hotzの各選手



男子リレー・表彰式 (8/20)。左から、フィンランド・スイス・スウェーデン・ノルウェー・チェコの各選手

## SQUAD BULLETINより転載

### 女子チーム総括

### 女子コーチ 吉田勉

今回のWOCを振り返るとき、特筆すべきはやはり日本初の女性ファイナリストを輩出したということでありましょう。個人戦については出発前は誰かがボーダーに近い成績を出してくればよいくらいで、トップに対してのタイムに実際的な目標をおいていました。しかし現地入りしてから木植の調子がよく、クラシカルな結果もルートプランニングのミスによるもの、体力的な問題によるものを除けばほぼボーダーのタイムが出せていました。そのため現実的な目標として予選通過を意識してショートに臨むことができました。決勝ではミスが出ましたが、予選通過を目標とし、決勝のトレインへの対応の練習を一切行っていなかったこともあり、この快挙に水をさすものではありません。その先については次回を期待してください(彼女もまだ若いので)。さて、チーム全体としては、クラシカルな予選ではトレインが臭しかったせいもありますが、ほぼ実力が出せたと思います。ショートについては木植以外はミスが多く、今一つでした。リレーは今回から1、2走が短く、3、4走が長いという形で行われました。これまでは調子の良いものから出して、できるだけレースになるようにするというオーダーで臨んでいましたが、今回はシステム変更に伴い現時点での実力を測るためにオーソドックスなオーダーを組みました。結果はほぼ91年並み(この時はチェコで行われ、やはり大陸的なトレインでありました)の成績となりましたが、消極的なレースながら、4人そろって大きなブレーキもなく最後まで順位の変化を期待できたという点で当初の目的は達せられたと思います(印象としては89年の男子並みになったのではといったところで)。

女子の今後の課題としては、走力は言うまでもありませんが、木植を含めてルートプランニング能力(より緻密な)、WOCを乗り切る体力があります。そして木植にあって他の選手にないものとしては、自分の技術に対する自信があります。ショートではコントロール付近にいなから自信のなさのために多くのロスタイムを出しており、それがリレーでの消極的なレースにつながっていると思われます。この克服には一つには多くの国際大会の経験が必要であり、もう一つは心理的なトレーニングが必要であります。なかなか困難な課題ですが、このことを常に意識し、ノルウェーのトレインに対する恐怖を克服することが今後の成功の鍵となるでしょう。



男子クラシカル表彰式 (8/16)

## クラシカル予選

男子予選1組			
1	JØrqensen Carsten	デンマーク	1:02:02
30	Mikhailov Alexandr	ウクライナ	1:09:30
34	鹿島田浩二	日本	1:10:43
57	入江崇	日本	1:18:42
男子予選2組			
1	Martensson Jorqen	スウェーデン	0:58:53
30	Gassner Ferri	オーストリア	1:07:53
38	村越真	日本	1:10:15
46	加賀屋博文	日本	1:15:55
女子予選1組			
1	Jansson Marlana	スウェーデン	0:48:58
30	Hall Kristin	アメリカ	0:59:52
36	木植早生	日本	1:03:16
45	田島利佳	日本	1:09:14
女子予選2組			
1	Kubatkova Marcela	チェコ	0:49:52
30	Baczek Barbara	ポーランド	1:01:27
45	福土淑子	日本	1:11:29
50	金子しのぶ	日本	1:15:49

## クラシカル決勝

男子			
1	Maartensson Joerqen	スウェーデン	1:30:19
2	Salmi Janne	フィンランド	1:32:04
3	Joerqensen Carsten	デンマーク	1:33:38
4	Karppinen Timo	フィンランド	1:33:39
5	Prokes Tomas	チェコ	1:33:51
6	Tvedt Jon	ノルウェー	1:33:53
7	Zridkavese Libor	チェコ	1:34:12
8	Omeltchenk Yuri	ウクライナ	1:34:20
9	Alekseev Vladimir	ロシア	1:35:10
10	Sild Sixten	エストニア	1:35:16
女子			
1	Olah Katalin	ハンガリー	1:05:50
2	Koskivaara Eija	フィンランド	1:08:39
2	Haque Yvette	イギリス	1:08:39
4	Jansson Marlana	スウェーデン	1:08:44
5	Kvniq Vroni	スイス	1:09:22
6	Sandstad Hanne	ノルウェー	1:09:48
7	Cieslarova Jana	チェコ	1:10:09
8	Romanens Marie-Luc	スイス	1:10:17
9	Kubatkova Marcela	チェコ	1:10:43
10	Schmitt GrFrauke	ドイツ	1:11:13

## リレー男子

1	スイス	3:34:21
	Berqer A.	0:45:30 1位
	Hotz D.	1:36:37 5位
	Aebersold C.	2:35:23 2位
	Buebrer T.	3:34:21 1位
2	フィンランド	3:35:43
3	スウェーデン	3:35:51
4	ノルウェー	3:38:01
5	チェコ	3:40:21
6	イギリス	3:43:33
7	デンマーク	3:43:48
8	ロシア	3:45:02
9	ラトビア	3:45:50
10	フランス	3:51:13
11	ドイツ	3:52:46
12	リトアニア	3:53:34
13	オーストラリア	3:53:36
14	ポーランド	3:53:38
15	イタリア	3:53:43
16	ハンガリー	3:56:37
17	エストニア	3:59:54
18	オーストリア	4:00:49
19	ウクライナ	4:01:23
20	ニュージーランド	4:06:11
21	スロバキア	4:12:47
22	日本	4:22:35
	加賀屋博文	1:00:47 25位
	入江崇	2:00:25 25位
	村越真	3:10:59 23位
	鹿島田浩二	4:22:35 22位
23	ベルギー	4:27:38
24	ルーマニア	4:33:13
25	アメリカ	4:46:55
26	白ロシア	4:57:17
27	ポルトガル	5:02:14
28	クロアチア	5:14:13
29	スロベニア	5:19:14
30	スペイン	5:28:25
31	オランダ	5:38:10
32	カザフスタン	6:10:47
33	南アフリカ	6:15:15
	失格 カナダ	
	失格 アイルランド	



女子リレー・快走するアンカー田島利佳選手 (8/20)

## 選手のみなさんのコメント

### 村越真

峠まで上ってふり返ると平野の眺望が開け、来た道のりの長さに感傷的になる。

WM95のリレーは、メンバー4人全員が、満足はいかないまでも、ほぼ納得のいくレースができた初めてのリレーである。それも一見冒険と思える、加賀屋-入江-村越-鹿島田というオーダーによってである。

これまでの19回、日本チームは唯一の例外を除いて常に「先行玉砕」というオーダーでリレーに臨んできた。それは一走でトップと5~10分差というエキサイティングな光景を我々に見せてくれたが、一走しかまともなレースができる選手がないということの裏返しでもあった。ここ数回はカッシーや入江など若い選手が伸びてきて、それが、二走、三走とつながるようになってきた。しかし「あのペースで最後まで走れたら・・・」という幻想にのみ目が向けられていたのも事実である。リレーは4人のトータルタイムでの勝負、4人目の選手がゴールしたときの順位で勝負が決まるのである。その当り前の事実を目を向ければ、今回のオーダーは、1・2走がショート、3・4走がロングという今回のコースパターンでは、至極常識的な選択であった。もちろんそれによって、あらたなりレーの姿勢が開かれたことは収穫である。そしてそのオーダーに踏み切ることのできるメンバーがそろったことは、男子チームの大きな進歩を物語っている。

満足のいく結果ではないにしても、出場35チーム中22位は割合としては過去最高である。トータルであと20分の短縮は射程圏内であろう。だがそれで上がる順位は2つ。そこから更に10分速くなることは現時点ではその手がかりすら見えない。その10分間に11チームがひしめいている。リレーの本当の面白さを味わうためには我々はそこまで歩んでいかなければならないのだ。

山道が険しくなるのは実はこれからである。そしてその道乗り越えてこそ、我々は美しい高山植物も、本当に素晴らしい眺めも、得ることができる。

最終ペースキャンプを作ることが自分の仕事かと自覚するこの頃である。

### 鹿島田浩二

遠征前、「今回は自分の納得のいくだけ準備をしただけにこわい部分がある」といったことがある。そしてこの予感はその中してしまった。ある程度満足のいくレースをしたにもかかわらずクラシックでは予選落ちし、その後選症を引きずってショートディスタンスでも精彩を欠いてしまった。自分の出来ることをきっちりやったにも関わらず、結果はそれほど変わらなかった。これから先、自分はどうな準備をすればいいのだろうか？WOGが終わった後はこのことばかり考えている。本当に頭からはなれない。電車に乗っていても、トイレに行っても、大学で実験しているときも・・・。それなりにアイデアはいくつか浮かんできた。さっそく実行してみたい。そして、その成果は秋以降の大会で示せばしめたものである。

### 加賀屋博文

初めての世界選手権に参加してみて、今の心境は？と聞かれても適当な言葉が思い浮かばない。強いてあげれば“もどかしい”ということになるのだろうか。

たくさんのチャンスがあった。クラシカル予選、ショート予選、リレー。3本走った。いいリズムで走れた部分も多かった。いけそうだと考えたこともあった。しかし結果としては全てミスの多いレースに終わってしまった。自分のベストを尽くしたとは言えない、けれどこれまでの自分のレース内容を考えるとそんな結果にも納得せざるを得ない。もっと速く走れそうなのに、やっぱり走れない。そんな自分自身に対して非常なもどかしさを感じるのだ。

しかし今回の世界選手権で得たものは大きい。これまで海外遠征では自分のレベルの低さを思い知るだけだったのが、初めて自分の可能性を認識することができた。クラシカル、ショートの予選通過、リレー1走でトップと5分以内は十分狙える。これからが本当の意味での世界への挑戦である。今のこのもどかしさを解消するために更にレベルアップして2年後のNorwayを絶対走ります。

今まで応援してくれた皆さん、ありがとうございました。





## 富士淑子

振り返ると全日本からあつという間の5か月でした。正直言って以前の自分を  
取り戻すのに必死で、夢中で過ごしていた気がします。今回のWMについては  
もちろん納得はしていませんが、自分なりに最大限の努力をした結果なので満  
足しています。ただ日本的なテラインだった分、順位やタイムは今の自分の実  
力を反映していると認めざるを得ません。

残念だったことは、世界は依然として遠く、前回と比較して手ごたえを感じ  
られなかったこと、そして実力以上(1.0)のパフォーマンスができなかった  
ことです。以前からの課題だったのですがOLでのスピードにやはり限界を感じ  
ましたし、普段通りにレースを走っているつもりなのに、すごくビクビクし  
ている自分がいたりして、未だに大会に飲まれている部分もありました。で  
も、参加国の増加で競える相手も増えたことは励みになり、挑戦のしがいもあ  
りました。

早生さんがショートで今まで夢でしかなかったことを実現してくれたことで  
私達は具体的な目標を持つことができましたが、トレキャン中から早生さんと  
は国内で感じる以上のレベルの差があり、まだまだ越えなければならない壁が  
あるなあというのが実感です。

他国の女子選手の中には子供連れで参加している方を何人も見かけ、お母さ  
んのパワーを見せつけられました(カナダのキャサリンは毎晩のように夜泣き  
する子供をあやしなながらレースに臨んでいました)。負けてられないですや  
ね。

また次のWMへの2年間が始まりましたが、国内でもっと切磋琢磨して女子  
全体が強くなっていきたいと思います。

多くの皆さんに(ドイツでも)応援していただき嬉しく、楽しい気持ちで走  
れました。どうもありがとうございました。

## 田島利佳

早生さんがShortで決勝に進んだことは、私達日本女子の選手にとって、さ  
らに大きな一歩を踏み出したと思います。早生さんと同じようなOLはできな  
いにしても、何をどうしたら良いのかわかっていけば、例えば自分ができる  
OL、技術をうまくそのテレインに対応し、冷静にコントロールしてレースが  
できるのならば、必ずしも世界と日本の距離はそんなに遠いわけではないと  
いうことでしょうか。今回の比較的易しいテレインで、様々なスタイルを持  
つメンバーがレースに臨み、その結果から選手はもちろん、女子全体のレベ  
ルアップについて何か具体的な方向づけができるのではないかと感じます。

自分としては、まだまだ準備不足で、結果を出すことは残念ながらできま  
せんでしたがクラシカル決勝のゴールを見て感動し、あの中を走ることがで  
きたらとノルウエーではどうにか決勝を走りたいなどと前向きな気持ちで  
WMを過ごしました。

応援、賛助していただいた方々には本当に感謝しております。次はもっと  
ワクワクするように、準備をして臨めたらなあと思います。



## 大西真理子 (アシスタント)

すべてが新鮮でとっても楽しかった1週間で  
した。オフィシャルとして参加した私でしたが  
選手の方以上に色々体験をさせていただいて  
嬉しかったです。

日本選手の方だけでなく、数々の有名な選手  
のゴールなどをみれたこの興奮は2度と忘れる  
ことはないと思います。特にショートで決勝に  
残った木植さんを午前の予選と午後の決勝でそ  
の走りを見れて感激したのは昨日のこのよう  
です。

次のノルウエーではもっと多くの日本選手が  
決勝に残っているといいなああと、全てのレース  
が終わったときに、オフィシャルらしく?思っ  
てしまいました。選手の皆さん、そしてその他  
のオフィシャルの皆さん、お疲れさまでした。

## リレー女子

1	フィンランド	2:50:33	
	Tiira K.	0:31:53	1位
	Kokkala R.	1:04:13	1位
	Koskivaara E.	1:55:58	1位
	Viiho A.	2:50:33	1位
2	スウェーデン	2:52:11	
3	チェコ	2:53:06	
4	スイス	2:58:06	
5	ドイツ	3:01:42	
6	ノルウエー	3:02:22	
7	ハンガリー	3:03:27	
8	イギリス	3:06:52	
9	ロシア	3:07:02	
10	デンマーク	3:10:42	
11	フランス	3:23:21	
12	オーストラリア	3:23:52	
13	ニュージーランド	3:30:24	
14	リトアニア	3:40:04	
15	オーストリア	3:41:31	
16	アメリカ	3:41:45	
17	ラトビア	3:49:30	
18	ベルギー	4:01:39	
19	スペイン	4:04:11	
20	アイルランド	4:08:45	
21	日本	4:23:51	
	富士淑子	0:55:42	23位
	金子しのぶ	1:46:29	21位
	木植早生	3:01:39	21位
	田島利佳	4:23:51	21位
22	白ロシア	4:26:53	
失格	カナダ		
失格	ポルトガル		

日本代表選手へのご声援  
ありがとうございます

WOC SQUAD JAPAN

# 第6回ジュニア世界選手権大会 (JWOC)

デンマークのホルセンズにて開催されていた第6回 JWOC (ジュニア世界選手権大会。Jr.WMとも呼ばれる) が開幕した。日本は90年にスウェーデンで開催された第1回大会から参加をしており、今年で6回目。第5回大会の昨年度からは、SQUADが選手選考に関わっている (SQUAD・JWOC担当は、第1回大会参加選手の利光良平氏)。今年度は初のセレクションレースも開催され、過去最高の9人が遠征を果たした。

JWOCはユニバーシアードと違い、制限年齢が若く (20才以下)、日本の大学で言えば、現役で合格している3年生の早生まれの人以下の者でないと参加資格が与えられない。現実的には2年生が中心のメンバー構成となっており、今年も9人中7人が2年生である。

結果は以下に示すとおり。

成績と一緒に、遠征した選手からいただいたコメントを掲載します。



7/9 ショート会場 (写真提供: 近藤選手)  
左から、小林る・羽柴・近藤・清水・丹羽・美濃部の各選手

## ショートディスタンス (95.7.9)

M20 4675m ↑165m 出走 141人

1	Gabor Domonyik	ハンガリー	25 : 50
2	Tomas Zakouril	チェコ	26 : 34
3	Michael Mamleev	ロシア	26 : 45
4	Roman Efimov	ロシア	26 : 48
5	Troels Nielsen	デンマーク	27 : 05
6	Jani Lakanen	フィンランド	27 : 22
6	Petteri Laitinen	フィンランド	27 : 22
8	Jrquen Rostrup	ノルウェー	27 : 38
9	Lubos Mateju	チェコ	27 : 39
10	David Farkas	ハンガリー	27 : 49
108	吉村充功	日本	36 : 58
111	羽柴公貴	日本	37 : 14
120	近藤貴文	日本	39 : 09
127	小林 力	日本	42 : 02
138	坂井洋平	日本	51 : 54
141	美濃部篤	日本	97 : 12

W20 3520m ↑125m 出走 101人

1	Christina Grndahl	デンマーク	24 : 47
2	Karin Schmalfeld	ドイツ	25 : 48
3	Iva Navratilova	チェコ	26 : 50
3	Tiina Jukkola	フィンランド	26 : 50
5	Zsuzsa Fey	ルーマニア	27 : 14
6	Annika Björk	スウェーデン	27 : 40
7	Sabine Gilqien	スイス	27 : 50
8	Aneta Jablonska	ポーランド	27 : 51
9	Paula Haapakoski	フィンランド	28 : 27
10	Eva Jurenikova	チェコ	28 : 39
94	丹羽美智子	日本	43 : 03
99	清水由布子	日本	54 : 58
100	小林るみ子	日本	63 : 49

## クラシック (95.7.11)

M20 11500m ↑505m 出走 139人

1	Gabor Domonyik	ハンガリー	70 : 02
2	Michael Mamleev	ロシア	72 : 41
3	Jani Lakanen	フィンランド	73 : 04
4	Tom Quayle	オーストラリア	73 : 06
5	Tomas Zakouril	チェコ	73 : 14
6	Evqueni Fadeev	ロシア	73 : 46
7	Kalle Dahlin	スウェーデン	74 : 24
8	Iqor Klimov	ロシア	74 : 32
9	Kolos Vajda	ハンガリー	74 : 41
10	Juha Peltola	フィンランド	75 : 12
117	坂井洋平	日本	102 : 19
118	吉村充功	日本	102 : 41
122	羽柴公貴	日本	107 : 09
123	近藤貴文	日本	107 : 35
131	美濃部篤	日本	119 : 43
133	小林 力	日本	123 : 41

W20 7800m ↑325m 出走101人

1	Christina Grndahl	デンマーク	60 : 24
2	Lenka Cechova	チェコ	61 : 51
3	Katerina Miksova	チェコ	62 : 37
4	Enikv Fey	ルーマニア	63 : 18
5	Ewa Kozłowska	ポーランド	63 : 49
6	Annika Björk	スウェーデン	63 : 52
7	Ragnhild Myrvold	ノルウェー	64 : 13
8	Paula Haapakoski	フィンランド	64 : 29
9	Katerina Pracna	チェコ	64 : 55
10	Eva Jurenikova	チェコ	65 : 34
91	小林るみ子	日本	100 : 25
97	清水由布子	日本	112 : 43
100	丹羽美智子	日本	132 : 55

## リレー (95.7.12)

M20 7100m ↑325m

1	デンマーク1	2:17:23	
	Jesper Damgaard	43:19	3位
	Mads Ingvardsen	46:48	1位
	Troels Nielsen	47:16	1位
2	ハンガリー1	2:18:01	
3	フィンランド2	2:18:07	
4	イギリス1	2:21:58	
5	スイス2	2:24:26	
6	スウェーデン1	2:24:32	
7	チェコ1	2:24:46	
8	ロシア1	2:24:50	
9	オーストラリア1	2:29:24	
10	フランス1	2:29:29	
11	ラトビア1	2:32:28	
12	リトアニア1	2:33:15	
13	ポーランド1	2:38:16	
14	オーストリア1	2:38:24	
15	ノルウェー1	2:38:47	
16	エストニア1	2:38:49	
17	ルーマニア1	2:45:50	
18	ウクライナ1	2:46:03	
19	イタリア1	2:46:06	
20	ドイツ1	2:47:29	
21	スロバキア1	2:53:56	
22	日本1	3:12:06	
	羽柴公貴	0:56:18	21位
	吉村充功	1:05:55	22位
	近藤貴文	1:09:53	22位
23	ベルギー2	3:15:38	
24	スロベニア1	3:41:46	
25	イスラエル1	4:01:38	
26	クロアチア1	4:33:12	

## 選手団のコメント

## 太田宏樹 (TeamLeader)

今回、彼等は自分の能力を外国で充分発揮しました。JWOCで結果を出すためには、日本でもっと速くなればよいのです。20才以下という制限は大学生になってからOLを始める今の日本において厳しいものです。早いうちからアプローチをはじめて(特に経験者は)高いレベルに育て上げることしか解決策はないでしょう。

さて、来年のJWOCはルーマニア、ブカレストから190kmのGOVORAで7/8-14に行われます。今回より生活面での不便は感じるでしょうが、物価はやたら安いし、Bulletin1に添付された地図を見ると傾斜はきついが白い山で微地形に富んだ面白そうなトレインが用意されているようです。

## 「JWOC行ってインカレでメダルget！」

JWOCは目標にするだけの価値と魅力を充分持っています。遠征帰りの選手達は清水が早くもインカレエリートを決めるなど、結果を出し始めています。今後の彼等にもどうぞ注目してください。最後になりましたが、ご声援ありがとうございました。

## 近藤貴文 (東京大2)

早いもので、JWOCからもう1か月が(この原稿が載るころにはもっと)経ってしまいました。思えば、楽しいことからついことまでいろいろありましたが、「行ってよかった」と今感じていることは確かです。レースの方は外人のペースに惑わされたり、単純なミスを連発するなど、あまりほめられたものではなかったのですが、結果を気にせず、素直に大会を楽しんでくることが出来ました(とはいっても手を抜いたわけではないのであしからず)。世界のトップランナーのスピードにはただ驚くばかりでしたし、日本チームのメンバーからは、いろいろな面で刺激を受けました。ショートのスラッシュゴールで(記録上)世界最速ラップをたたきだしたのも一生の記念となるでしょう。といいつつも日本に帰ってくればJWOCのメンバーという目で見られることは必至でしょう。そのプレッシャーに押しつぶされずオリエンテーリングを楽しみ続けていきたいと思っています。

最後になりますが、いろいろ面倒を見て下さった太田さん、丸山さん、利光さん、どうもありがとうございました。そしてメンバーのみんなにも。来年JWOCに出るチャンスがある皆様へ。是非ルーマニアを目指して下さい。きっと何かが得られるでしょう。フッフ！



宿舎での折り紙教室(だそうです)。(写真提供:近藤選手)

## 坂井洋平（北海道大2）

この度のヨーロッパ遠征は、出発の1週間前になって、レース中に転倒し、左ヒザを8針縫うケガをしてしまい、不安をかかえての出発となってしまいました。しかしJWOCのレースの前日にはジョギングも普通にできるようになり、またチームリーダーの方や、メンバーのみんなの気遣いもあって、精神的には、とても良い状態でレースを迎えることができました。

大会1日目のショートでは、緊張のあまり、とても情けないレースをしてしまいましたが、クラシカルとリレーでは、あの大舞台にもかかわらず、まあまあ普通のレースができたと思います。

この1ヶ月の遠征では、本当に様々な経験を積みました。しかし私にとって最もプラスになったことは、実際にヨーロッパでレースをしてきたことではなく、むしろ、この遠征に向け、3か月間、ずっとトレーニングをしてきたことや、羽柴さんや、山口君をはじめ、北海道まで噂が聞こえてくるような選手ばかりの中で、一緒に合宿やレースをして、彼等を身近に意識できるようになったこと、そして、彼等のレースや、OLに対するとりくみ方を間近に見ることができたことだと思います。全く平凡な普通のオリエンティアである私が、ここまでやってこれたのは、本当にメンバーのみんなのおかげだと思います。

この文章を読んだ全国の一年生の皆さんが、来年のルーマニアに向けて一人でも多くチャレンジしてくれることを願っています。

最後に、チームリーダーやメンバーの皆さん、OB、部員をはじめ、お世話下さった沢山の方々、そして、3か月間付きっきりでコーチして下さった細瀬さんに、心からお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

## 羽柴公貴（早稲田大3）

約1週間という短い期間であったが“JWOC”の名前通りの価値ある経験を積むことができた。一番の経験は世界の舞台をかいま見ることができたという直接的なものではなく、自らがこの世界のイベントに参加するために行った準備の域を越えないが、未知の精神の充実と、事後の、哲学的な自身への鼓舞の形で発現した気の昂揚であった。これによって、オリエンテリングで遠征したという根幹を感じるものの、自分の内奥にある新たな精神活動の領域を目覚めし発見し、またそれをオリエンテリングの枠の中に返すことによって再び進歩すら自覚しうる肉体活動に結び付けられるものとなったといえる。私は、この一番の経験とともに、さらに実際にヨーロッパで体験したこととともに今後オリエンテリングに取り組みたい。



開会式会場にて。前列左から、坂井選手・吉村選手・羽柴選手・丹羽選手・清水選手。

後列左から、丸山チアリーダー・美濃部選手・小林のみ子選手・太田チアリーダー・近藤選手・小林力選手。（写真提供：清水選手）

## リレー (95.7.12)

W20	4200m	↑ 220m	
1	チェコ2	1:50:20	
	Katarina Miksova	34:16	2位
	Katarina Pracna	35:39	1位
	Eva Jurenikova	40:25	1位
2	スウェーデン1	1:53:10	
3	スイス2	1:54:45	
4	フィンランド1	1:55:03	
5	ルーマニア1	1:59:48	
6	デンマーク1	2:02:43	
7	ポーランド1	2:03:18	
8	ドイツ1	2:04:01	
9	ノルウエー1	2:06:59	
10	ハンガリー1	2:10:42	
11	ロシア1	2:14:39	
12	エストニア1	2:14:45	
13	ラトビア1	2:15:01	
14	イギリス1	2:26:49	
15	オーストラリア1	2:27:51	
16	ベルギー1	2:39:25	
17	イタリア1	2:41:04	
18	ウクライナ1	3:06:21	
19	日本1	3:56:01	
	清水由布子	1:46:04	20位
	小林るみ子	1:08:30	20位
	丹羽美智子	1:01:27	19位

## 丹羽美智子 (東北大2)

はじめての海外脱出、はじめての成田空港、はじめてのプロペラ機、はじめての北欧テライン、はじめてづくしの経験をしてきました。WMのおこなわれたデンマークの林は道が発達していてとても日本的で、それほど抵抗感をもつこともなく適応できました。しかし結果は…、まあしかたがないといえしかたがないといえるのではないのでしょうか。もっと準備をしっかりとできたのかもしれない。キャンプ地での生活は国際交流もできたり、ロシアのイワンと交渉して「ルシコン・タイプイワン」も入手できたり、食べ物もおいしかったし、とても充実していました。最終日のディスコでは浴衣で踊り狂ってしまったり。しかしデンマークのおねーちゃんにラクリスジュースなるものを飲まされてしまった。とても刺激的な味がします。これも国際交流なのね、と怒りをおさえる私でした。WMの(JWOCの)後にはエスティゲーター3days、O-RINGEN5daysにも参加しましたが、WMほど緊張することもなく楽しむことができたのでとてもよい思い出となっています。WMのメンバーは皆他大学から来たのだけれど、いい奴ばかりでよかった。こんど同窓会などひらきたいくらい。ありがとう。

## 清水由布子 (東北大2)

思っていた以上にあっという間に過ぎ去ってしまった一ヶ月でした。出発前にできた準備は決して十分ではありませんでしたし、実際JWOCの成績も散々でしたが、成績以上に得たものは大きかったと思います。最大の収穫は、JWOCのコースを走り切ることができたという自信がついたことでしょう。それから外国人選手の走りを間近で見ることができたのもよかったです。彼等は一体何を見て走っているのか全然わかりません。あんなひどいルートチョイスは私でもやらないなと思うところを平気で走っていて、さっくりコントロールにたどり着いてしまうのはとても不思議だ……。しかし外人選手の中にも私とたいして変わらない人もいて、同じところでミスしていたりするとほっとしました。レース以外でも、他国の選手とマップを見せあったり、折り紙の指導をしたりして交流できたのもいい思い出です。もっと語学力があれば更に深い話ができただろうが、私の英語力ではマップを見せてもらうのが精一杯だったのが残念です。

とにかくいろいろなことがあって、この遠征を一言でまとめるのは難しいのですが、本当に行けてよかったというのが一番の感想です。オリエンテーリング以外の面でも、今回の遠征は自分を考え直すいいきっかけになりました。このことはオリエンテーリングだけでなく、もっと広い意味でこれからのプラスになると思います。

このような機会を与えられた幸運と、さまざまな意味で支援して下さった方々に心から感謝します。



リレー会場 (7/12)。左から、坂井選手・小林るみ子選手・丹羽選手。(写真提供: 近藤選手)

— 1998年 長野オリンピック冬季競技大会 文化・芸術祭 —

国際スキーオリエンテーリング大会 最新情報 1998.1.24 - 1.31 第1回

長野県オリエンテーリング協会  
理事長 元木 悟

長野オリンピック冬季競技大会（以下、長野オリンピック）まであと900日。長野市やオリンピック開催地のみならず長野県内全般に、準備のための工事や大会運営など、様々な話題でいっぱいである。長野県オリエンテーリング協会（以下、長野県協会）では、オリエンテーリングの発展と振興を目的に、長野オリンピックに併せて、「1998年 長野オリンピック冬季競技大会 文化・芸術祭 国際スキーオリエンテーリング大会」の開催準備を始めている。今回より2回にわたり、「国際スキーオリエンテーリング大会」の準備状況をO-JAPANの読者の皆さんに報告する。今回は過去のO-JAPANを振り返り、スキーオリエンテーリング（以下、スキーOL）の大会招致のエピソードと、大会準備状況の最新情報をお伝えする。

[O-JAPAN誌上では]

O-JAPAN誌上で、「冬季オリンピックにスキーOLを」という記事が取り上げられたのは今から4年前。O-JAPAN No.101（1991年12月発行）である。利光良平氏が「The Australian Orienteer」誌 No.591 Oct.から見つけた「スキーOLがノルウェーのリレハメルにおける1994年冬季オリンピックでデモンストレーション種目として開催されるであろう」という記事が最初である。同じO-JAPANのストリーマーで田口氏は、「わが国では1998年に長野開催が控えており、ぜひ実現を期待すると同時に、もう準備に入っても遅くはない。たとえ、オリンピック種目として採り上げられないという結果が出て、独自のデモンストレーションは隣県で時期をずらせば可能であろう。そして同様に南隣ではフットオリエンテーリング（以下、フットOL）の国際大会を企画して、海外の、特に北欧のオリエンティアを呼ぶ絶好のチャンスである。とにかく前進あるのみ」と書いている。

この頃、長野県オリエンテーリング協会の理事に就任した元木は、田口氏の提案に興味を示し、長野オリンピックの運営主体である「長野オリンピック冬季競技大会組織委員会（以下、NAOC）」の運営体制を細かく調べ始めた。ちなみに、当時の長野県協会には、大学出身オリエンティアが4名しか活動しておらず、主に木村氏（山口大OB、現在、長野県協会理事）と元木が、信州大学の面倒を見ながら何とか活動するといった弱小団体であった。しかし、1991年には（社）日本オリエンテーリング協会（以下、JOA）発足後初の主催大会である「東日本オリエンテーリング大会（千人塚大会との2日間大会）」を成功させ、長野県協会は上昇気流に乗っていた。田口氏の提言を受けて元木は1992年2月、O-JAPAN No.103の誌上に「長野五輪でスキーOL開催は可能なのか？」という報告を掲載した。

この報告はナショナルチームブリテン（現在のスコードブリテン）にも掲載され、一部のオリエンティアから多くの反響を呼んだが、しばらくしてスキーOLの話題は、O-JAPAN誌上から完全に途絶えた。それは、長野オリンピックにおけるスキーOL開催において、JOAの協力が得られなかったためである。なぜなら、国際オリンピック委員会（以下、IOC）が1992年のフランスのアルベールビル大会から、オリンピック公開競技という概念を捨ててしまったこと。1994年に予定されていたリレハメル大会のスキーOLエキジビジョン競技が残念ながら見送られたこと。国際オリエンテーリング連盟（以下、IOF）のスキーOL委員会の会議で「オリンピックプログラムへの導入は、1998年の長野より2002年を目指した方がより現実的な目論見であるはず」との見解を示したこと。以上の内容はO-JAPAN No.108（1992年7月発行）に詳しく掲載されている。

しかし、数年の年月を経て再び、スキーOLがO-JAPAN誌上で論じられるようになった。No.143（1995年6月発行）の海外誌の情報から、No.144（1995年7月発行）の村越氏の記事と盛んに取り上げられた。今回は「1998年 長野オリンピック冬季競技大会 文化・芸術祭 国際スキーオリエンテーリング大会」として準備を進めている大会の最新情報を皆さんに伝えたい。

### 〔国際スキーオリエンテーリング大会の要旨〕

スキーOLは、1949年にオリンピック冬季競技大会種目としてIOCによって承認されている。ちなみにフットOLも1977年に承認されている。IOFは1988年のカルガリー大会以来、1992年のアルベールビル大会、1994年のリレハンメル大会と、スキーOLの実施の可能性を追求してきている。しかし、残念ながらその達成は成らなかった。特にリレハンメル大会ではエキジビション競技としてのスキーOLの大会準備はできたのだが、計画は実を結ばなかった。1996年に行われるスキーOLの世界選手権は、このリレハンメルを会場に行われる予定である。現在、IOFは2002年のオリンピック冬季競技大会の正式種目となることを目指して精力的な運動を展開している。私たちは、日本におけるスキーOLの今後の発展と振興を目指して、長野オリンピック開催年に、「IOF認定 国際スキーオリエンテーリング大会」開催の準備を進めている。

本大会は1998年1月24～31日に行う予定である。オリンピック憲章には「IOC理事会の同意無しには、オリンピック競技大会の期間中、もしくはその前後各1週間の間に、主催都市もしくはその周辺、または、その他の競技場で、国内大会・国際大会を問わず、他の重要な会合もしくはイベントが開催されることがない」とうたわれている。国際大会の2月中の開催が不可能であるため、本大会は全世界にスキーOLをアピールできるように、オリンピック選手村開村（1998年1月24日）に併せて時期を設定した。場所はイベント開催に熱心な長野県小県郡真田町菅平高原。大会形式は、IOF認定の国際競技部門と一般参加部門を設ける。国際競技部門は、海外及び国内の一流選手を対象とし、これら選手によるスキーOLの国際大会を行い、今後の日本国内のスキーOL、ディスタンス・スキーの振興を図ることを目的とする。一方、一般参加部門は国内の一般の人々を対象にする。この部門への参加には、スキーOL、ディスタンス・スキーの経験の有無など、資格に制限は設けず、広く長野県内外の中・高・大学へも参加を呼びかけ、スキーOLの底辺の拡大と普及を目指す。

### 〔菅平高原とサポート体制〕

上信越高原国立公園に位置する菅平高原は、標高2,207mの根子岳の裾野にひろがる高原リゾートで、長野市の東に位置し、長野オリンピックのメイン会場から最も近いスキーリゾートでもある。今回、スキーOLの開催を計画しているのは菅平牧場を中心とした広大なエリア。既に Mr. Patorick Baufer（スキーOLの元スウェーデンナショナルチーム選手）からもお墨付きのエリアである。

「国際スキーオリエンテーリング大会」は長野県協会主催、国際スキーオリエンテーリング大会実行委員会主管の予定である。実行委員会の人選は「国際スキーオリエンテーリング大会」開催が決定し次第、ボランティアを募る。現在は、地元の菅平高原観光協会（会長：真田町町長）をはじめ、本大会趣旨に賛同していただいている学識経験者やオリエンティアが中心になって準備を進めている。今回はこの場をお借りして各方面でご協力いただいている方々を紹介したい。

まず、地元交渉では、菅平高原オリエンテーリングクラブ（会長：宮澤裕二氏）をはじめ、菅平高原観光協会の皆さんにたいへんお世話になっている。また、菅平牧場畜産農業組合（組合長：吉田萬蔵氏）には大会会場となる菅平牧場の使用を快く引き受けていただいた。

東京都OL協会の伊藤会長には、NAOCとの交渉の最初の設定をしていただき、青木JOA理事、都留文科大学一木教授（山梨県OL協会副会長）、筑波大学飯田教授、筑波大学橋助教授、いわき短期大学寄金教授（元筑波大学教授）には、国際大会開催のための貴重なご意見をいただいた。

また、オリエンティアでは、村越氏にIOFとの連絡を担当していただき、スキーOLに関する多くの海外情報を得られた。関東甲信越ブロックオリエンテーリング会議や、長野県協会には色々な面でご声援をいただいている。特に長野県協会事務局長の烏川氏と理事の木村氏には長野県大会等の仕事の多くを分担していただいている。普及面は、スキーOL普及同好会の武石氏、高嶋氏が中心になって活動している（詳細は次回に掲載）。国際大会の地図調査はR. M. オーサービス（代表：山川克則氏）長野支部が予定され、調査者には今のところ、利光氏、安斎氏、高嶋氏と元木があたることになっている。更に、1995年9月からは世界選手権日本代表選手の金田収子さんが宮澤氏の経営するホテル白樺荘に勤務しながら、スキーOL関連業務の他、菅平高原地区のOLの普及に当たる。関係者の今後の活躍が多いに期待される。

### 〔長野オリンピックとNAOC〕

長野オリンピックは1998年2月7～21日に開催される。それに間に合うように、1996年までに大会運営実施計画が策定され、1996～1997年にかけてプレオリンピック開催、1997年2月にはオリンピック説明パンフレットが発行される。また、「国際スキーオリエンテーリング大会」を位置づけようとしている「文化・芸術祭」は長野オリンピックの1年前より始まり、相撲、歌舞伎、サイトウキネンオーケストラなど日本の文化・芸術が海外に広くアピールされる。オリンピック公開競技が無くなった今、スキーOLを新しいスポーツ文化として、長野から全世界に広報してもらおうというのが、私たちの狙いである。

長野県では1991年11月にNAOCがスタートした。NAOCは意志決定機関になる実行委員会と実務担当の事務局で構成されている。発足当初は実行委員43人、事務局員28人の体制であったが、1991年に企画、財政、マーケティングなど7委員会の専門委員会が設置され、1994年には競技、施設、広報などを含めた13委員会に拡充された。現在、NAOCは500人から成り、その60%は長野県職員、次いで開催都市の長野市職員の比率が多く、ゴールドスポンサーの八十二銀行をはじめ、マスコミ関係者、電通や博報堂などの民間企業を含めた大所帯で運営されている。

現在、「国際スキーオリエンテーリング大会」のNAOCとの交渉には、月に3回程度の割合で、宮澤氏と元木が中心となってあたっている。スキーOL関連は大会運営部文化芸術課（樋口課長、丸山担当）、併設イベント関連は広報報道部広報課（山田課長、駒村担当）及びマーケティング部（1995年9月14日より接触）が交渉窓口である。その他、柴本総務部長、山下渉外部長にも相談にのっていただいている。

その結果、併設イベント関連では（長野オリンピックの100日前に行う）「JOA公認 第20回長野県オリエンテーリング2日間大会」がNAOCの後援の承諾を得られ、次回の第16回長野県オリエンテーリング2日間大会の成績書からは、使用ごとに申請するという条件付きで、長野オリンピックのエンブレムマークの使用許可もおりた。「国際スキーオリエンテーリング大会」については7月17日にNAOCへ企画書を提出したところであり、今後の交渉次第であるが、NAOCからは良い感触を得ている。本大会が「文化・芸術祭」のプログラムに組み込まれ、盛大に開催できる可能性は高いと感じている。今後、NAOCから長野オリンピック総合プロデューサーの浅利氏（劇団四季主宰）に企画書があげられ、浅利氏の承諾が得られれば、日本オリンピック委員会の承認後に、IOCで最終決定される。決定の時期については他のイベントとの兼ね合いもあるためはっきりしないが、NAOCからは今年中に決定したいとの意向が示されている。

### 〔併設イベント〕 参加者大募集・・・大会を盛り上げるためのフットOLのイベント・・・

長野県協会では菅平高原開催の「国際スキーオリエンテーリング大会」を盛り上げるために、以下の併設イベントを計画している。地元の志気を高めるために、また、国際大会開催エリアの雰囲気を感じてもらうために、多くの皆さんの参加を期待します。是非、皆さんのOLカレンダーに予定を盛り込んで下さい。

- (1) 第17回長野県オリエンテーリング大会 兼 第1回菅平高原オリエンテーリング大会  
（北信越学生オリエンテーリング大会併設）パーマナントマップ「菅平高原」オープン記念  
日時：1995年11月3～5日。参加申込受付中。締切間近です。
- (2) 第19回長野県オリエンテーリング大会 兼 第2回菅平高原オリエンテーリング2日間大会（予定）  
（第4回日本学生ショートオリエンテーリング選手権大会 及び リレーオリエンテーリング併設）  
日時：1996年11月2～4日。
- (3) JOA公認 第20回記念長野県オリエンテーリング2日間大会（予定）  
（長野オリンピック冬季競技大会の100日前に行うNAOC後援の大会）  
日時：1997年11月1～3日。

次回は「国際スキーオリエンテーリング大会」招致活動の経過と、大会開催の意義、問題点を報告する。

(1995年9月5日)



# オリエンティアのための Medical Advice

OLCレオ 愛場 鷹雅

## 熱中症の話

夏休みを利用して夏合宿をされるオリエンティアも多いと思いますが、夏場は暑さに対する対策が必要です。今回の話は「熱中症」です。

### ・熱中症とは

「熱中症」というのは、「OLに熱中する、いわゆるタコ」のことではもちろんなくて、高温の下で人に起こって来る障害をまとめて指す言葉です。人間の体温は通常36℃程度で一定に保たれていますが、これは体内での熱の産生と、体の表面からの熱の放散がバランスがとれているからです。運動をすると熱が発生しますので、バランスをとるためにはこれを放散しなければなりません。熱の放散の方法には、輻射、伝導、対流、蒸散などがありますが、まわりの温度が皮膚の温度より高い場合には、蒸散が唯一の放熱手段になります。蒸散は汗をかくことによって促進されますが、その時には湿度が関係してきます。高温多湿のもとでは、汗の蒸散が少なくなり、容易に体内に熱がこもるようになります。もともと激しい運動では体温は1~2℃上昇しているのですが、限界を超えて運動を続けると、さらに熱がこもり、ついに体温調節がうまくゆかなくなり、病的な高体温になってしまいます。

熱中症は次の三つに分けられます。

#### (1) 熱痙攣

高温の下で激しい運動をすると、大量の発汗が起こって、水分、塩分が失われますが、このとき水分だけを補給すると、塩分の濃度が低下し、突然筋肉の痙攣が起こります。

#### (2) 熱疲労

高温下の運動では、筋肉、皮膚へ行く血液が多く必要ですが、同時に脳の血流ももちろん維持されなければなりません。汗をかいて体の中の水分が失われると、心臓からの血液の供給がこれらの組織に十分行かなくなります。このために全身の脱力感、倦怠感、めまい、吐き気などの症状が出現し、ひどい場合は失神します。体温の上昇はあまりなく、大量

の発汗、血圧低下、頻脈、皮膚蒼白などの症状があります。

#### (3) 熱射病

熱中症の中では最も重篤で、異常な体温上昇により、脳の働きが障害されるものです。日射病というのは、この中に含まれ、直射日光に長時間あたることにより起こってきたものを言います。体温はしばしば40℃以上になり、頭痛、めまい、嘔吐などから始まり、運動障害、錯乱、昏睡、痙攣、不随意運動などがみられます。重症では発汗も止まり、非常に危険な状態になります。

### ・熱中症の原因

熱中症の起こりやすい条件としては、気温、湿度が高い、直射日光による輻射熱が大きい、風が少ないなどがあげられます。日本の夏は、高温多湿で熱中症の危険が高いのです。また、選手の身体の側の条件も問題です。特に暑さに慣れていない夏練習の開始時期に、そして体力が十分でない人に発生しやすいようです。学生スポーツなどでは、死亡率は高くはないけれども、軽症を含めるとかなりの熱中症が発生しているものと推測されています。また夏場だけでなく、春、秋にも発生しており、冬でも気温がある程度上昇すると、あまりトレーニングしていない人が無理なランニングをした場合には十分に起こりうるといわれています。

### ・熱中症の対策

熱中症の予後は、高体温、意識障害の続いている時間によって左右されるため、治療はまず、体温を速やかに低下させることです。軽症の熱疲労の場合では、涼しい場所に運び、頭部を低くして寝かせ、水分、塩分を補給してやることにより、通常速やかに回復します。しかし重症で口から水が飲めない場合には、点滴による水分塩分補給が必要になります。またアイスバックで、頸、脇の下、鼠径部などの大きな血管が体の表面に近い部分を冷却する方法も良いようです。



### ・熱中症の予防

熱中症は注意さえすれば防げるもので、環境条件、身体条件、運動条件の3者について考慮しておく必要があります。このうち最も重要なのは環境条件ですが、OLの場合は自然の影響をまろに受けるので、運動条件とともに主催者が考慮する必要があるでしょう。参加者のレベルに合わせた適切なコースセットが必要ですし、直射日光のあたる道走りより、林の中を通らせるルートの方が望ましいわけです。またコース途中で給水できる場所を設けてやる必要があります。

次に身体条件ですが、トレーニング、体力の不十分な者、暑さに慣れていない者に起こりやすいと言われています。暑さに対する慣れは、1週間くらいでできるとされていますので、高温下での運動が予定されている場合は、その1週間前より軽い運動を短時間から始め、徐々に強度と時間を増してゆくことが必要です。その際にも体調に留意し、水分と塩分を補給することが重要です。早く暑さに慣れるためには、安静にしているだけでは効果は少なく、積極的に動き回るほうが良いと言われています。しかし普段冷房の効いた場所で過ごすことが当たり前になってしまった我々現代人には、ちょっと難しいことかもしれません。

夏合宿で疲労困ぱいした後の大宴会。楽しいものではありませんが、アルコールの飲み過ぎは脱水状態を引き起こします。夜更かしをして疲れた体にムチ打ったの合宿最終レース。炎天下を走るとどうなるのでしょうか？ 気をつけたいものです。

# 第3回 6人リレーOクラブカップ

1995年9月9日 長野県駒ヶ根市「駒ヶ根高原」

京葉OLクラブ初優勝

多摩OL3連覇ならず



恒例となりつつある、R.M.O.サービスの6人リレーが今年も開催された。一昨年度の第1回大会はトータスの大会（ハケ岳）と、昨年度の第2回大会はOLCルーバーの20周年記念大会（根の上高原）とタイアップして開催されているが、今年もまた長野県OL大会との2日間合同イベントとして開催されている。社会人クラブが楽しめるイベントとして年々盛り上がりも増しており、今年度は99チームにも及ぶエントリーがあった。恒例行事として定着しそうである。

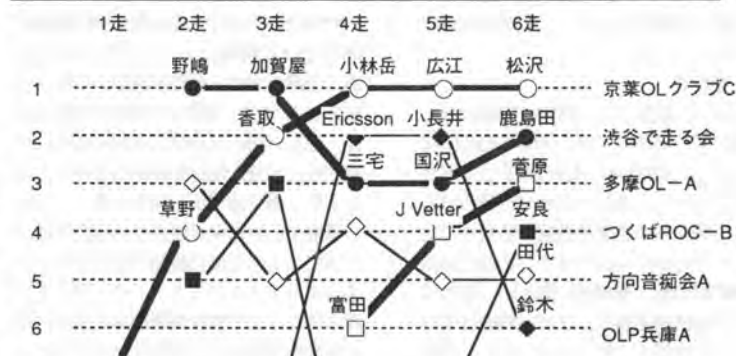
レースは1走を、三河OLC、京葉OLクラブAなどがトップで返ってくる。後に入賞するチームはこの時点ではやや出遅れ気味。京葉OLクラブCの小山選手がトップと4分差の8位、方向音痴会の金子選手（日本代表）が5分差の16位、渋谷で走る会の山岸選手が7分差の26位などで帰選している。2走で、渋谷で走る会の野嶋選手が快走してトップへ。京葉OLクラブCの草野選手も4位に上がってきた。5位には、つくばROC-Bの永井選手。3走は、渋谷の加賀屋選手（日本代表）がトップを守り、京葉Cは元々カレチャン香取選手が2位に引き上げる。4走に入って渋谷は女性選手。三宅選手が順位は3位と落とすが健闘を見せる。この間に京葉C・小林岳人選手がトップにたち、2位には前半出遅れていたOLP兵庫がエリクソン選手で一気に挽回。やはり前半出遅れていた過去2回のディフェンディングチャンピオン多摩OLも富田選手で6

位に浮上してきた。5走は、京葉C・広江選手、OLP・小長井選手、渋谷・国沢選手でそれぞれの順位を守り、上位3チームの順位に変動なし。多摩OLがVetter選手で4位につけた。レースはアンカー勝負となる。トップでタッチを受けた京葉C・松沢選手は先のインカレで失敗経験がある。しかもあとを追うのは、1分20秒遅れで、OLP・鈴木選手（日本代表）、約5分遅れで、渋谷・鹿島田選手（日本代表。全日本champ）である。優勝争いはほぼこの3人に絞られていた。トップから8分弱おくれて、多摩OL・菅原選手が出る。しかし3連覇の偉業はもはや厳しい。各チームのメンバーとクラブ員が待ちうけるなか、会場に最初に姿を表わしたのは松沢選手だった。そしてそのすぐ後

ろには渋谷・鹿島田選手。しかし逆転を狙うにはもはや厳しい距離か？しかも足取りは松沢選手がまさっていた。

京葉OLCのウイニングラン。昨年度の、アンカーでの逆転負けの雪辱を果たしての、見事な初優勝だった。

2位、渋谷で走る会・鹿島田選手のあと、3位には多摩OL・菅原選手。前champの意地を見せる。4位には、つくばROC・安良選手。この3月のインカレよりしく、いつの間にか順位を上げていた。5位には、終始、入賞圏内をキープしてきた方向音痴会の田代選手。最後の入賞枠は、OLP兵庫・鈴木選手が滑り込んだ。優勝も狙える位置でスタートした鈴木選手だったが足の故障がたたったか？足を引きずって会場に姿を現わしていた。



## 入賞メンバー

1 京葉OLクラブC	小山清	草野望	香取伸嘉	小林岳人	広江淳良	松沢俊行
2 渋谷で走る会	山岸倫也	野嶋茂樹	加賀屋博文	三宅朋美	国沢五月	鹿島田浩二
3 多摩OL-A	鈴木規弘	千葉あかね	田中正人	富田吉郎	J. Vetter	菅原琢
4 つくばROC-B	林ゆかり	永井直樹	諏訪雅貴	河村健二	藤井範久	安良和寿
5 方向音痴会A	金子しのぶ	上條圭	広瀬二郎	小沢啓	高尾昭次	田代雅之
6 OLP兵庫A	橋本裕志	尾上俊雄	岩倉毅	Mats Ericsson	小長井信宏	鈴木康史

## ベテランカップクラス OLP兵庫2連覇

昨年度から新設されたベテランカップクラスは、昨年に引き続きOLP兵庫が優勝。2連覇を遂げた。昨年はアンカーを努めた尾上選手が、今年はクラブカップクラスで出走していたが、層の厚さに変化はなく貴祿のV2だった。

2位・サンスーシ、3位・富士フィルムOLは、ともに初入賞となった。

## ベテランカップクラス

1 OLP兵庫	2:27:00
2 サン・スーシV3	2:32:12
3 富士フィルムOL	2:52:19
4 京葉OLクラブS	3:06:30

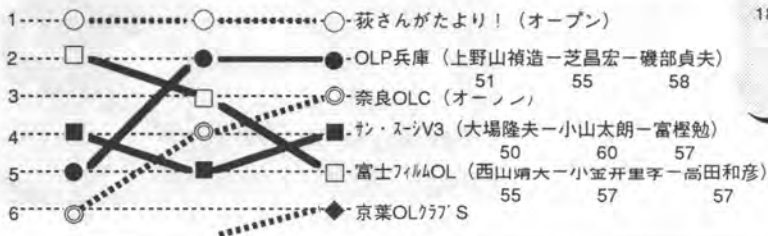


OLP兵庫チームのウイニングラン

## クラブカップクラス

1 京葉OLクラブC	4:00:22
2 渋谷で走る会	4:00:43
3 多摩OL-A	4:15:40
4 つくばROC-B	4:15:46
5 方向音痴会A	4:18:12
6 OLP兵庫A	4:26:12
7 つくばROC-A	4:28:54
8 ルーバー保古の湖	4:29:29
9 三河OLC	4:33:22
10 京葉OLクラブA	4:35:33
11 東大OLK15期B	4:38:49
12 多摩OL-B	4:40:01
13 静岡大OLC	4:41:10
14 京葉OLクラブB	4:41:19
15 鳩の会選抜	4:42:11
16 千葉OLK-A	4:45:23
17 越王会石黒チーム	4:46:36
18 レオ95	4:46:55

以下多チーム失格



表彰式。後列左から、渋谷で走る会・京葉OLクラブ・多摩OL。前列左から、つくばROC・方向音痴会・OLP兵庫

形容しがたい気分良さ

松沢俊行（京葉OLクラブ）

4走終了時点でOLPとの差が4分、決走会との差が7分。トップでタッチを受けるとその差の変化は分からない。でも気負わず緩まずいい状態で出走できそうな気がした。

広江さんが選ってくる。やはりトップ。後続チームの6走はWM選手たちである。特に鹿島田さんと比較した場合、自分が1割増のタイムを叩いてしまうのは現時点において仕方がないことだ。そこでこう考えた。「とにかく丁寧に手続きをこなしていく。10秒づつなら何回も差を縮められたっていい。最後にわずかに残っていれば・・・」

前半は考え通りの展開。しかし中盤、期せずして鹿島田さんを目撃、3-4分のリードを確認してしまう。後半は緩斜面テクニカル区間。「ギリギリカー」。

微妙に心が揺れ動く。ミスが重なり始めた。「また逆走負け??」何度か思いかけ、「でも大丈夫」と必死に自分に言い聞かせた。すると迷走中の鹿島田さんをとらえ（一度かわされていたのだ）並走となる。

同時パンチ、最後の勝負レッグへ向かう。鹿島田さんが脱出していくのを見送り、コンパスを振る。方向が違う・・・。思いきって自分を信じる。「ついていくのが恐いのか?」「勝負を避けるのか?」自問が続く。「でも」振り払って思い直した。「これが、今日の俺の勝負だ」

結局コントロール周りに2人は収束。その後揃ってウロウロし、またしても同時パンチ。決着は道走り区間に持ち込まれた。こちらの方が息が荒いような・・・。

ということで脱出後30歩で勝負をかけることに。これが奏功、会場から見える位置に最初に姿を現わした。チームメイトが飛び上がって喜んでいる。まだ、勝てるかわからないのだが・・・。ぬか喜びには終わらせられない。力を振り絞る。

最終アタック。1回つまづいたら終わり、最後まで緊張していた。パンチ。ゴールレーンに入り、「もっとゆっくりでいいぞ!」との声を聞く。「ああ、やっと・・・」

振り返るとミスだらけのレースだ。しかしチームメイト、そしてそれ以外の人から祝福を受け、喜びを分かち合うのはいいものだ。「インカレ以来の感動だった」という学生もいた。

まだまだ解決しなくてはいけないことが多い。しかし今回は過去の自分と現在の自分を制することが出来たのだ。

この勝利は「ある友人」に捧げよう。

鹿島田浩二（渋谷で走る会）

（OLをする最後のコントロール）を2人でミスをしているときに、「追いついたんだから負けてもいいや」という気持ちが少しあったと思う。それでもほとんど同時にコントロールについて、その後の道走りでじりじりと差をつけられている時も、一応は頑張って追いつこうとしていた。でもまるで夢の中みたいに足は動かないし、逆に松沢は重力なんかお構いなしに登りをすたすた走って小さくなっていく。結局、ラスコンでミスしてくれることを願ったけど、そうは間屋が卸さないですよ。来年は渋谷でのトレーニングを活かして最後の走りでも負けない脚を身につけますよ。

菅原琢（多摩OL）

京葉OLクラブのみなさん、優勝おめでとうございませう。今回は完敗でした。来年は主力選手がシニアにあがることもあり、またいい勝負が出来ると思えます。今回の敗因は多くの選手がつまらないミスを重ねたためです。自分に負けないで走る、この大切なことをもう一度かみしめて、基本にかえて自分の仕事をするようにします。今度は挑戦者として頑張りますので胸をかせてください。



京葉OLクラブ/5走広江選手から、アンカー松沢選手へ

クラブ紹介 1

## 京葉OLクラブ



京葉OLクラブのみなさん（9/9 大会会場にて）

1977年4月に発足。来年の11月頃に20周年記念大会を企画しているようだ。年に1回は大会を開く活発なクラブ。今回のリレーなどへの取組も真剣。

現在、会員は55人程度。そのクラブ員の稼働率の高いのが自慢だという。7割くらいの会員は動いている。富士のAPOCの時には36人が会場にいらした。海外遠征も活発で、今年遠征した会員は12人程度いる。

学生のOBが入会するようになったのは10年くらい前から。地域クラブとしては早い方か。当初はOBの勧誘によるものだったのが、最近では、「千葉にきたので...」と、自分から入ってくるという。開かれたいいクラブである。

目標は、全日本champをだすこと。田中徹さんが言っていた。『松沢や大西（真理子）を筆頭にみんながんばって欲しい』とのことだ。

## クラブ紹介 2

## 澁谷で走る会

6人リレーが終わった4日後、筆者は「澁谷で走る会」が毎週水曜日に走っているという代々木公園を訪れた。NHKの裏にある、「織田フィールド」と呼ばれるトラックが、毎週水曜日に一般解放されている。18時ころ行って見ると、予想をはるかに上回る人の多さにまず驚いた。こんな中から、連中を見つけてことができるだろうかと不安。しかし案外あっさり出会えるものだ。オリエンティアの人達は18:30~19:30ころにかけて集まってくる。この日は、15人程度が集まった。鹿島田・加賀屋・福士・田島といったWM選手が顔をそろえている。東大OLK系の人も多い。OBの野嶋君・山本(英)君・渡辺(寿)さん・三宅さん、現役の野上君・後藤君・大西真理子さんなどが来ていた。渡辺さんと大西さんは筆者と同じく初めての参加だという。会員であるとかないとか関係なく気軽に参加できるようだ。一般のトラックを走るだけのことだから当然といえば当然か。そもそもだれが会員であるの

か、はっきりしているのだろうか？

発起人は、NHKに勤めている国沢君(元WM選手)のようである。同期の加賀屋君や野嶋君らが中心メンバーのようだ。活動を始めたのは1年ちょっと前くらいか。彼等に近しい人を誘って人数を増やしていったのだろう。そういえば、国沢・野嶋・田島・・・なんていったらトータス系だなあ。塩沢さんも来ていた。

場所は、千代田線・代々木公園駅で下車、5分程度NHKの方へ歩いて行くと、うっそうとした林が見えるので上って行くはずがわかる。JR原宿駅からでも徒歩10分程度。更衣室があって、ロッカーもある。だいたい19:00~20:00がトレーニング時間帯。20:30ころにはあがって、みんなで食事に行くようだ。興味があれば一度参加してみるといいかもしれない。一般の人でもたくさん走っている。1週400mのトラックを自分のペースで好きなだけ走ればよい。澁走会のみんなも、それぞれまじまじに走っていた。社会人にはいい環境だと思う。



澁谷で走る会のみなさん+α (9/13 代々木公園)



真剣にトレーニングに励む会員のみなさん  
加賀屋選手(左)と山本英勝選手(右)

## クラブ紹介 3

ろく  
つくばROC

つくばROCのみなさん (9/9 大会会場にて)

ROCはRunning & Orienteering Clubの略だとか。でも取材したある会員もはっきりわかっていなかった。あまりこれといった活動はしていないらしい。ごくまれな飲み会を除けば、この6人リレーへの参加なども非常に大きなクラブ活動になるようだ。しかし、つくばROCが動き出すのはこれからだろう。現在会員は16人。そのうちの9人がこの春入会した。これまでがクラブ活動といえるほどの活動のできるクラブではなかったのである。

発起人は橋先生。中村授さん達とクラブを起こした。転勤などで筑波を離れた人は会員でなくなる。会則には、「必ずつくばROCの所属で出る」とも明記されているらしい。鉄の掟だといっていた。クラブの複数所属を好まないという橋先生の思想が現われているのだろう。

今年の入会会員は、安良・小海・佐々木・林ゆかり・・・など、ついこの間のインカレで大活躍していた筑波大のOBが目立つ。なるほどリレーも強いはずである。今後の活動と活躍に期待させていたこう。

レポート 桐田幸宏

# パ = マネイトコース

り(ま〜と



□1995年2月11日(祝)  
埼玉県 ~吉田 95-1~  
「八丁湖」

[距離] 13 km  
[ポスト数] 10本 PC-O-Map

池袋から約50分の「東松山」駅からマスターマップのあるフレンドシップハイツセンターまでは約6kmである。フロントで1985年(昭和60年)作成の1:20,000のマップが1枚100円で買える。①は吉見観音(安楽寺)で、田圃から登り出した③の500m手前は道が少し変更している。④の400m手前は大造成中なので注意を要する。⑥の北向地藏を通り⑦を過ぎると400mで笹藪の道となり、倒木数本の下をくぐる。⑨は神社のあるポンポン山で、関東平野の眺めが良い。黒岩横穴を右手に見ると八丁湖に出て⑩がある。1周4時間弱。

(フレンドシップハイツセンター  
☎0493-54-2030)

駅名：  
〒272 千葉県市川市北方町 4-1844  
吉田 勉  
☎0473-39-2257



□1995年4月10日(月)  
三重県 No.6 ~富田 95-11~  
「木公反」

[距離] 10 km  
[ポスト数] 10本 PC-O-MAP

JR紀勢本線「徳和」駅下車。駅前にマスターがあり鮮明。1994年10月に三重・松阪OLCの名で、②のポストがないことと、土地造成中の箇所に斜線が記入されている。マップは駅前の喫茶店「伊多利屋」(8:30開店、無休)にあり、1986年調査のもの。②はきれいに再建されていた。④の付近はマスター記載よりも広い地域が土地造成中で立入禁止になっており、遠回りして入ってみたが、結局④は不明だった。⑤から⑨までは田畑と丘陵を縫って回るが、一部は土地造成後でマップと現状が違っていた。それでも割合簡単で2時間で終った。

(三重県OL協会 ☎0592-24-2404)

□1995年5月6日(土)  
群馬県 ~富田 95-12~  
「鉤街道 花輪C  
小夜戸コース」

[距離] 7 km  
[ポスト数] 10本 PC-O-MAP

JR両毛線「桐生」駅で「わたらせ渓谷鉄道」に乗り換えて「花輪」駅下車。なお、東武鉄道で行く場合は「桐生」駅では両鉄道のホームが並んでいるので簡単に乗り換えることができる。無人の「花輪」駅前「今井屋」(7時開店、年中無休)にマップ、駅前にはマスターABCコース3種類が鮮明に掲示されており、平成5年5月16日オープンと記されていた。木佐木輝雄氏と大高竜亮氏の既訪リポートを参考にした。Cコースは大部分里道でABCコースに比べると楽である。②は建物の陰にあり見つけにくい。金精様のある「豊郷神社」⑦から木佐木輝雄氏のレポートに従って南下西進し、山へ入ろうとしたがマップ上の小道が悪く、結局北上東進して⑧へ達した。ところが⑧は移転したらしくポストマークがわずかにかかっている祠の横にあった。そのため南の崖を登る必要はない。やさしいコースなので2時間で終った。  
(東村役場企画観光課☎0277-97-2111)

□1995年5月7日(日)  
群馬県 ~富田 95-13~  
「鉤街道 オイ車輪  
A・Bコース」

[距離] A-10, B-9 km  
[ポスト数] 各12本 PC-O-MAP

本日も木佐木輝雄氏と大高竜亮氏の既訪リポートを参考にした。A・B両コースは一部重なり合っているのが同時に歩くこととした。A②へ入る山道が歩きにくいとのレポートにより、また、B⑨も考えてA②へは自動車道路から逆に入った。放置されたブルドーザーのある荒地から入りコンパスワークで容易にA②を発見した。A③へは自動車道路から出戻りした。A④からA⑤へと苦しい登りがつづく。A⑤は「五覧川城跡」(標高592.9m)にあり花輪の町が眼下に広がる。A⑤を少し降りた所まで自動車道路が来ており工事中であった。A⑥のあとA⑧へ向かってだらだら登る。A⑧の北

にあるU字カーブを回ると右手にA⑧から来る小径が見つかるから踏み跡を頼りに沢を渡る。A⑩に近づき道から木の下にあるポストは見付かったが、そこへ入る道がよくない。このような時に備えて常時携帯している小型一眼望遠鏡を見たが、このコースのポストは背が高いが首が小さく記号もひどく小さくてはつきりしない。A⑩から北へ伸びている道の北端は途切れており、そこへ行くにはA⑩を囲むU字形道の右下あたりから笹原へ入り、道が切れたらコンパスワークに頼るしかない。欲張ったせいか4時間も掛かり大変疲れた。しかし、3コースともどかですばらしく文句なく推薦できる。

(東村役場企画観光課☎0277-97-2111)

□1995年5月20日(土)  
栃木県 ~富田 95-14~  
「茂木婦人の家」

[距離] 9 km  
[ポスト数] 10本

1990.12.16に木佐木輝雄氏、1995.3.10に大高竜亮氏が突破しているの、そのレポートを参考にして私も出かけたが失敗であった。宇都宮から茂木駅まではJRバスが早い、午前中は6:44、9:18、10:08、11:28だけで、1時間10分かかる。東野バスは時間が悪いからタクシーで「茂木婦人の家」へ行くしかない。ここ迄でいい加減疲れてしまう。今回はポスト記入済みマップを持っていたので「河井上」の菓子店前でタクシーを降りて⑦から始めた。⑧へ入るには「中川小学校」へ向かう自動車道のやや西の山道を登り右手に土手が現れる所の側の木に⑧が寄り掛かっている。送電線の下に⑨に到達したがポストがない。⑩へ向かう道は夏草に覆われて歩けない。引き返して婦人の家近くから⑩を狙ったが、これもまた道が切れてしまう。⑨⑩はあきらめた。②へ降りる道は分ったが、ごみか山積して危険で入れない。③から④へ向かう那珂川沿いの道は崖崩れで閉鎖されているので「鎌倉山」へ一旦登ったが、西から回り込んだ方がよかった。⑤は倒れていた。⑥は行き過ぎないように十分注意したが見当たらなかった。結局10ポスト中6ポストしか分からなかった。PCベテラン以外の方にはお勧めできない。

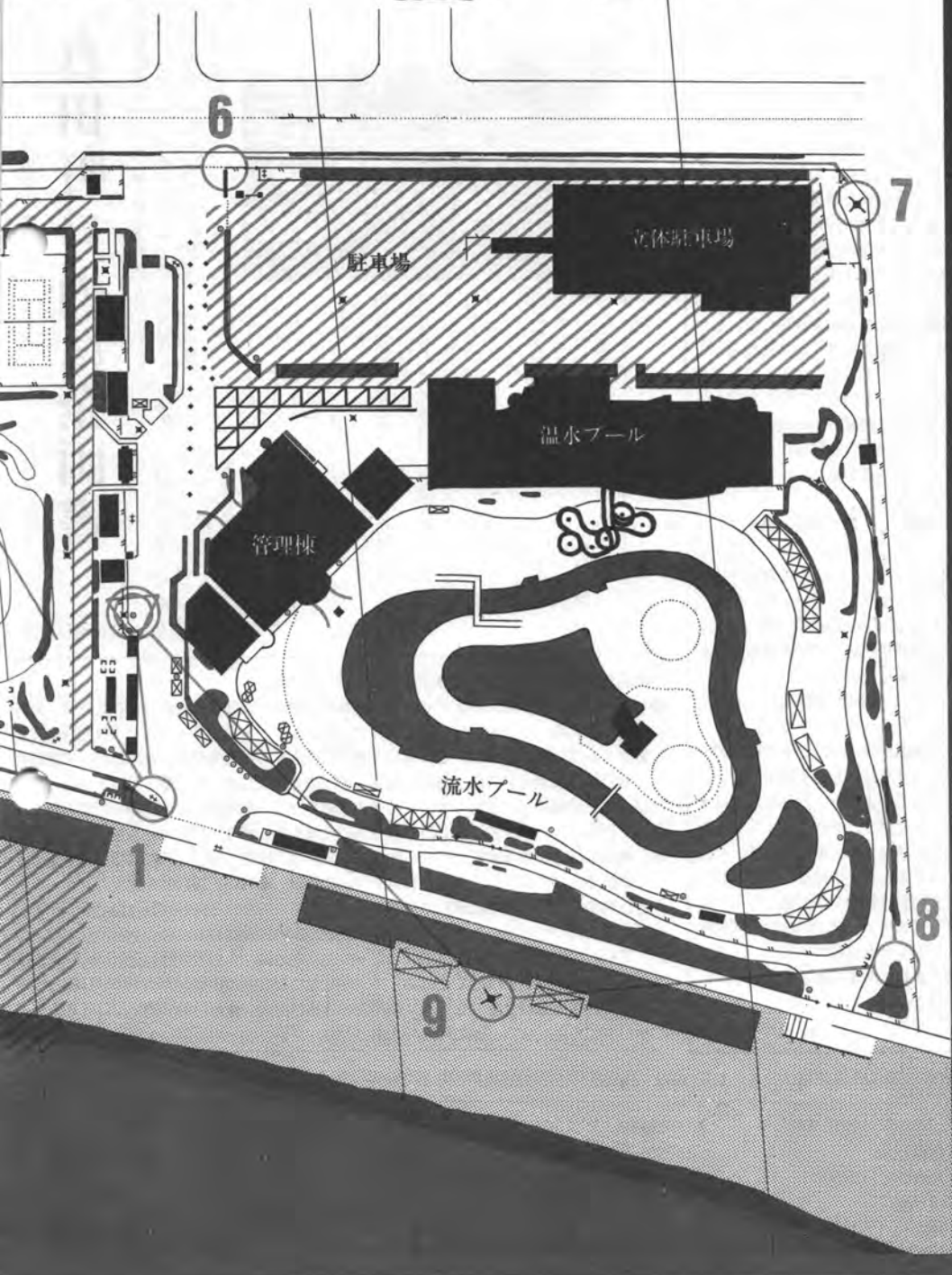
(茂木町教育委員会  
☎0285-63-1111)

駅名：  
〒225 横浜市青葉区あざみ野  
1-12-13-303

富田 徹

せんか

# MAP



“現代オリエンテーリングの父”

## ビヨン・チェルストレーム氏 死去

後に“SILVA”社となった企業の創始者として、そして世界中のオリエンティアに知られていた、ビヨン・チェルストレーム氏が、去る8月26日にスウェーデンのストックホルムの病院で死去されました。85才の誕生日を9月8日に控えてのことでした。

故人は、アルビッドとアルバーの兄弟とともにスウェーデンのオリエンテーリング界で有名になりました。1930年代の初め、彼らはリレーOやスキーOでほとんど無敵で、1935年と36年のリレー、そして故人は35年の個人チャンピオンとなっています。しかし、彼の興味は競技よりも、Oにとって欠くことのできない2つの要素、すなわちコンパスと自然そのものへと向いていきました。

ビヨン・チェルストレーム氏はまた事業家としての能力を早くから認められています。すでに10代の後半でスキー用具の小売りを始め、型にはまらない方法でセールスしました。1930年、わずか19才で氏はチェルストレーム兄弟社という会社設立登記を行なっています。

当初は、この事業は質素なかたちで始まりました。しかし、特に液体によるスムーズな動きをコンパスに与え、さらにやはり若いオリエンティア、グンナル・シランデル氏の協力で分度器を組み合わせたという工夫などたびたびの試作を重ね、これにより会社は発展し始めたのです。

この“SILVA”コンパスは世界を制し、今なお多くのこの種のコンパスをリードする役を果たし、オリエンティアの多くに愛用されています。

1946年、氏はアメリカに渡り、そこで中古の車を買ひ、北米大陸のあらゆるところに旅しながら、コンパス輸出の可能性を探る傍ら、地図とコンパスについての教育方法の改善を考えました。彼は、スティグ・ヘデンストレーム氏とともに“The Sport of Orienteering”や“Be Expert with Map and Compass”(1955年初版以来50万部を超える古典的ベストセラー)などを著しています。

40年代に“SILVA USA”“SILVA CANADA”を創設し、必要上アメリカに住むことが多かったようです。そして、71年にはUSオリエンテーリング連盟が設立され、その理事の一人となり、当時のIOFとの連絡はほとんど彼が行ない、IOF普及委員会の一員でもありました。1976年、氏はその委員会をアメリカとカナダに招き、コロラド・スプリングスのオリンピック委員会を訪れたり、モントリオール五輪を見学したりして、IOFと北米との結びつきを強めました。1979年には日本にも訪れ、都内で講演会を行なったこともあります。このようにスウェーデンのみならず世界の現代オリエンテーリングの父とも言われるビヨン・チェルストレーム氏の死は惜しまれてあまりあるものです。

謹んでお悔やみ申し上げます。

田口 肇

# 五輪文化事業に名乗り

「スキーオリエンテーリング大会を」



スキーオリエンテーリングは、地質とコンパスを頼りに林の中を走り、目的地へ到達する所要時間などを競うスポーツ。計開は98年1月下旬の約一週間、菅平牧場一帯で、国内外から約六十人の一流選手を招いて開く。菅平高原光協会(山口縣)理事長の試算だと、経費は七千五百万円前後という。

真田町が冬季五輪の文化プログラムでスキーオリエンテーリング大会開催を計画している菅平牧場一帯

小泉町真田町議会は四日、九八年の長野冬季五輪開催前に行われる文化プログラムで、「国際スキーオリエンテーリング大会」を迎える菅平高原で開きたい、との町の意向を承した。町は今月中に長野冬季五輪組織委員会(NAO)に企画書を提出する。

## 真田町、月内に企画書

7月5日付け「信濃毎日新聞」より

＝編集部日誌＝ 2か月ご無沙汰してしまいました。

◆6月10・11日：那須の分室で6月号の編集にかかる。実は後で分かったことだが、先月21日(京大会)とこの10日に家を留守にしたことが、8月のO-JAPAN発行に大変な影響を及ぼした。つまり、この両日「連合町内会」の役員会があったのだが、欠席裁判で、8月の「夏祭り」の取り纏め(運営)担当にされてしまった。◆6月17・18日/25日：6月号編集(この間、カナダ行きの準備＝ツアー参加者への連絡等を仕事の合間に縫って行なう)。◆7月1・2日：勤務先の仕事を持ち帰り、10日という長い休暇に備える。◆8・9日：7月号編集：ページ数を少なくして、出発(14日)前には版下完了をめざして頑張る。この間、カナダ大会プログラムの翻訳。◆14日：15:00の便でバンクーバー向け出発のため、4時頃起床して10時30分ギリギリまでO-JAPANと自治会の仕事を片づける。いつもどおり、カレンダーの校正だけ家内にかませる。いつもどおりでないのは、7月号の発送作業を留守部隊(と言っても家内と娘、そして今回は近所の大村真佐子さん＝港南OLCが手伝ってくれた)にかませたこと。◆この後、カナダでの日程は次号で。◆7月29・30日：全てを忘れて勤務先の仕事に没頭。◆8月第3週までは「夏祭り」にかかり切る。そして、過去最高の人出となり、「祭り」そのものも大成功!でした。

9月24日開催の大阪OLC主催「ショートO大会」の要項の8月号綴込みができませんでした。深くお詫び申し上げます

O-JAPAN 発行人/田口 昭子	: 購読料	: 編集責任者/田口 肇
〒234 横浜市港南区日野南7-9-5	: '95.4月~'96.3月	: Chief Editor:
TEL.045-891-7004 FAX.045-891-2500	: (高校生以下)95年度1年分	: Hajime Taguchi
分室=Annex TEL.0287-77-1977	: 1部あたり頒布価格	: Editorial Address:
NIFTY-Serve ID VYE01053		: 7-9-5, Hino-minami, Kohnan-ku
郵便振替口座(番号)00270-9-46870 (加入者名)O-JAPAN 編集部		: Yokohama, 233 Japan